

ライプニッツに於ける個性の問題 (二)

由 良 哲 次

二、ライプニッツに對するエテイシズム的理解 (續)

以上に於て私はライプニッツの哲學體系の中心思想の把握に於て、凡そ、獨斷的形而上學的、數理的、自然科學的、論理的、認識論的、經驗的、心理主義的等の種々なる解釋の立場のあることを述べ、その何れもがライプニッツの眞にして全たき理解について吾等を満足せしむるものでないことを知つた。しかして、私はこれらの諸立場に反して、少くもこれらの不充分の幾分かを補ひうるものとして、私固有の立場をエテイシズム的理解と名づけた。私は先づこの立場に關して一應の説明を與ふべき責をもつ。

この私の立場は先づ一言もつてこれを掩ふならば、ライプニッツの中核的なる根本思想、モナッド論は、その眞相に於て、歴史的實在を遁しての先天的自覺的理解であつたと解釋する立場である。こゝに言ふ、從つて又ライプニッツに固有なる先天的

とは單なる經驗論的にあらず、又單なる形式論的にもあらざる實體論的なるものであり、彼の所謂實體形相の概念に含まるゝ實體綜合の思想に聯關する。又こゝに自覺的と言ふのは單なる心理的でもなく、論理的でもなく、歴史的實在の自覺、——即ち前者との結合に於て、先天的自覺を意味する。彼のモナツド論は現實的にして個性的なる歴史的實在の特質を通して考へ進められ、その本質的特質をもつて全宇宙を説明せんとするものであると考ふるに於て、又特有の個性的實體の根源的綜合を根本原理としてもつと考ふる所にもしくはこれを基本としてすべてを理解せんとする所に、他の上掲の諸見解と差別さるゝ所以が存するのである。この歴史的實在、その先の天的に考へられたる個性的實體に於ける綜合的構想力を根幹と見る點に於て、並びに彼に於ける意志の根源作用を重視する點に於て、或はこの見解を又人間論的として、特質づくることを得るでもあらうが、併し私はこれを單なる經驗論的人間論や相對的歴史主義と差別せん爲に、これを特にエティシズム的理解と名づける。私はこゝに此の所謂エティシズム的理解に就ての一應の定義を下すとともに、又何故にこの理解が、彼の思想體系の本質的理解に對して必然的であるかを論證せねばならぬ。しかして此の論證は史的考察と理論的論證とに分れるであらう。ライプ

ニッツに於ては數理的自然科學的並びに論理學的業績がその貢獻を著しく謳はれ、こゝに於て彼の全價値と根本特色とが汲みとられてゐるの觀あるに拘らず、私の考によれば、彼の人性論的思想と深き結合をもつ實體形相の思想は、彼の思想生成の最初の黎明を標しづくる一六六三年の *Disputatio Metaphysica de Principio Individui* に於ける個性化の原理に關する考想以來、彼の全發展を導く根本的熱情であつたと考へられ、これが又彼の嚴密科學性の要求と數理的創見を産んだ動機であり、彼の數理的自然科學的業績と常に相併んで存し、その價値に於ては決して前者に劣ることなき歴史、人文科學的業績は、晩年に至つてその根本特質に於て前者を包攝融合してその神學的形而上學に達したと考へられる。かゝる彼の生涯の業績と思想の開展に於て彼の哲學的特質の源泉と構成の基點を後づけんとする發展史的考察の企てを、私は史的考察に於て論じて見たい。更に論理的論證にては、私は人性論的論證と實體論的論證とに分つて考察したい。人性論的論證にては、彼の個性實體もしくは實體形相なる概念と、歴史的實在もしくは人間の意識との關係を探り、實體論的論證にてはその特有なる實體綜合力について考察して見よう。

ライプニッツが自ら言へる如く、すべての錯綜せるものを、その自明なるものに於

て解明の端緒を得、認識を終極の根柢に於て基礎づけんがためには、人は何よりも、これを足場とし、これより前進し得る唯一のアルキメデスの不動點を探つてこれを使まねばならぬ。併し乍ら彼に對する理解に於て、この唯一の不動點を何に見出すかは學者その見る所を必ずしも一にするものではない。吾等に先立つ時代のライプニッツに對する論理的認識論的理解を把持した諸學者の殆んど相一致したことは、この不動點を *in ipsa generali natura veritatum* に求め様としたことである。——真理の一般的性質そのもの、これにその哲學の出發點と、あらゆる解決の基準を求めようとする所にライプニッツ哲學の中心的特質が存するとせられた。クテュラー、ラツセルカッシーラーの如き、ライプニッツ解釋に於ける中心を論理的なるものに措かんとするものが、等しく強調するのは正にこの點である。まことに彼の全哲學を通じて、ひとり論理學、認識論のみならず、形而上學、倫理學、神學を通じて、彼の思想傾向の根柢として止まるものは、正に彼のこの眞理、眞理てふ概念である。カッシーラーがその『認識論問題』に於てライプニッツをもつて、認識の眞理そのもの、認識の論理的原理をその研究の自己目的とした近世哲學史上最初の人であると理解したことも、理由あることである。(Vgl. Cassirer: *Erkenntnisprobleme*. II. 2A. S. 126)

しかし私は、このライプニッツの論理的解釋者が、この眞理ワてふ概念を單に論理的眞理とのみ解し去ることに飽き足らない。この眞理とはひとり、永久眞理をのみ指すのではなく、事實に於ける眞理、現實在の個性的實體に於ける——彼が時に爾く表現せる——形而上學的眞理をも含むべきである。單に眞理の客觀的理念性のみならず、具體的なる個性の主觀に於て、自覺の事實に於て、妥當力を有する內的明證の眞理をも含むものでなければならぬ。彼は眞理の定義を下して *Veritas ergo veritatem esse Propositionum seu cogitatum* とする。(z. B. Gerh. VII. S. 190) 眞理とは單に命題の客觀妥當を意味するのみならず、又意識の内容的なるものに於ける内面妥當の意味従つて自ら現實在としての個性の構想作用に於ける具體的妥當の意味をも含んだのである。論理主義的解釋者が、ライプニッツの眞理を只管形式的認識論の意味にとり、客觀的妥當性とのみ解釋し去るはライプニッツを完全に理解するものではない。否、私の理解によれば、ライプニッツの固有の眞理概念を彼に得しめたものは單なる論理的思索ではなく、史的現實としての人間の實在の實體的本性の洞觀であつた。彼の眞理概念の一般的定義に於て *praedicatum inest subjecto; le praedicat; est dan le sujet* といふことは單なる論理的意義よりのみにては理解しうべくもない根柢をもつて

ある。述語を含む主語たるものは單なる論理性ではなく、個性的實在としての眞實體を意味した。彼の哲學的關心は決して一般的 *Prædicat* にあつたのではなく、唯一的實在としての主體にあつた。その主體がもつ眞實在性は歴史の個性に於て見出さるゝ如き個性的實體であつた。彼は現實的なるものゝ自覺の根源に本質的形相として生くる構想の力を見究めることによつて、あらゆる偶然なるものを必然化しようとした。彼の所謂 *scientia generalis* は、すべてを抽象の普遍に理性化することがその目的ではなく、すべての種類の眞なる命題——所謂全稱にも、單稱にも、必然にも、偶然にも、すべての述語は主語に於て内在的に含まるべしと言ふ、内面的必然的關係を明かにすることを目的とした。(Cicero, VII, S. 62) しかしてこの内面的必然を基礎づくるものは個性實體の先天構想力、もしくは内面的創造力である。^{註1}

先きにも述べたるが如く、ライブニッツにはその學的特質として數理的、分析的、悟性的啓蒙主義と、歴史的综合的、主意說的、人間論的との二面がある。一は彼の數學的、自然科學的業績となり、他は歴史的、政治的、哲學的、宗教的著作として表現してゐる。從來ライブニッツが主として研究され、強調されてゐたのはこの前者の側である。しかし、ライブニッツには數理的と歴史的との基底をなす、より深き形而上學的實體

論的なるものがあつた。この形而上學的實體論的なるものは單なる數理的自然科学的なるものより達しうべきものではなく、數理的なるものゝ基礎に實體論的なるものを移入することによつてもしくは、歴史的なる實體より數理的なる方法的處置を通して導かれ、深めらるゝことによつてのみ達せられ得べきものである。ライプニッツは *sub ratione generalitatis*——すべてを理性の眼をもつて透徹しようとした意味にては、まことに唯理主義である。然し彼は唯一性をもつ個性的實體と、根源的無限の唯一實在とを、悟性の淺き理解をもつて平面化する程の啓蒙主義ではない。ライプニッツ自身が史的區劃の上では所謂啓蒙時代に屬し、しかしして又現代に於てライプニッツが注目され復活せしめられたのは、主として主知主義的、論理主義的、嚴密自然科学的興味からであつたがためである。けれどもライプニッツはデカルト、スピノザの傳統よりは一の轉廻的なる使命の許に立つてゐる。只ゾルフの才に乏しきライプニッツ解釋は、彼を啓蒙主義的偶像に化せしめた。けれどもデカルトの哲學的沈潜の動機をなしたものの、スピノザの根柢に動いてゐた熱情が、ライプニッツに於て冷氷の如き理智に閉ざされたことは理解することは出来ない。彼にてはデカルトの懷疑、スピノザの憧憬を導いた以上の人間的なるものゝ力の泉があつた。

ライブニッツは決して啓蒙時代の子ではなく、次の時代を孕める天才であつた。彼は單なる啓蒙的主知主義者ではない。もし彼が單なる啓蒙主義の哲人でありしならば、彼はゾオルフとともに亡び去つたであらう。啓蒙時代に生きた哲人としてのライブニッツは單なる啓蒙以上の基礎をもつてゐた。その故にこそ正に彼は永遠である。私の理解する所によれば、ライブニッツにてはその思索の最初を標しつげた *locum Ideo* は實に個性的なるものであり、その全思想の底流となつたものは實に人性論的宇宙觀であつた。

かくライブニッツ自身の哲學を啓蒙主義的にあらすとして把握することは、自ら同時に、彼に對する理解の立場が、單なる悟性的立場にあらざることを意味する。凡そ私の意味せんとするライブニッツに對するエテイシズム的理解とは二つの特色をもつ。即ちライブニッツ哲學の特色に關して悟性的啓蒙主義的をその根本特色として認めるのではなく、却つてその根柢に主意主義を認めることその一つである。その二は彼の哲學的特質は人間的、歴史的なるものより出發して、しかも、これに於て本質的實體的なるものを求めんとするにあつたことである。しかして茲に顧みて注意すべきことは、自らがこの立場を支持することは、それが單に自らの

立場の特質として主張するに止まるのではなく、この立場そのものが捉へられんとする対象に最も適はしき権利をもつ所以は、対象そのもの、思想的特質の根本原理もしくはその基礎的構造と正に相一致することの認識に立脚することである。即ちライブニッツに對する理解の立場が主意主義的、人性論的たることはライブニッツ自身の思想體系の根本特質を固より特有なる條件的意味をもてる主意的人性論的として認めることの主張を含む。換言すればライブニッツに對するエテイシズム的立場とはライブニッツの思想自らのエテイシズム的特質の承認の上に立脚する。理解する立場の特質と、理解せらるゝものゝ根本特質との一致の承認に於てこそ、最も深くして眞なる理解の可能は存する。

ライブニッツの哲學體系に於ける主意說的特質と、従つて又それと思惟との關係に關しては、後章詳細に觸るゝ所あるが故に、こゝにはこれを略したい。只この把握が單なる恣意に基づくものにあらざることは、——ライブニッツに於ては個性的實體の根本特性を *conatus* に認められ、理性的精神を主宰する神の道德的性質が根本的に措定され、これによつて實現せられたる世界は自ら最善の特質を具したことによつても明かであらう。彼にては最善の意志が究極に要請されてゐることは、むしろ

axiome を超えた——ライブニッツの言葉をかれば——一の demand である。

ライブニッツの理解に於て、その人性論的意味を認め、意志を根本要素として強調することは、彼に於ける理性的思惟、特に神の思惟の超越的自律性を無みするものではないであらうか。ライブニッツに於ては、慥かに神の思惟による永久真理の自律性、超越性は存する。ライブニッツが後に主知主義的唯理論的のみ理解せられ、展せられたことも決して無理ではない。しかし、真理の確立を左右する姿意は神の意志ではなく、神の思惟に於て、無限可能の姿の中よりその compossible と調和に於ける最良のものを真理として規定し、實在性を與ふる所に既に神の意志が見出される。神が無限の可能を思惟し、その最良の唯一を選んで現實に齎らし出す所に、その意志が認められる。神の意志は決して神の理性と相逆ふものではない。可能の思惟は最良と實現のために存する。神は不可能を思惟せず、思惟に於ける單なる可能は實在ではない。實在性は只神の意志によつて可能であつた。神の意志なくして實在なく、その實現のための決定と遂行はすべて神の善意によるもの、唯一性としての個體形而上學的實體は神の意志の創造的規定による。ライブニッツに於ては實在といふことの關する限り意志が基底である。ライブニッツにては思惟は可能に關

し、意志は實在に關する。(尙ほライブニツツに於ける思惟と意志との關係に就ては特に後章に於て詳しく論述したい。)

エテイシズムの見解は神に於ける意志のみならず、人間に於ける意志の根柢性を承認するが、しかし又その思惟の力を無視するものではない。神の實現に先立つて神の思惟の存すべきことは、ライブニツツの言ふ通りであるが、併しその思惟も神が *compossible* として、可能なるものとして思惟し、最善として實現を欲したとする所にライブニツツのエテイシズム的特質が存する。すべて存在するものは善としてその存在の根據を有し、善として願はれたるもののみである。人間の知性は實在と生起の終極理由を、即ち神の意志の根據を跡づけるものとして、終極の根據の認識に導くものとして意味を有する。知によつて見出さるゝ眞とは、よき實體の本質法則である。永久眞理は神の思惟に於て存し、その限り人間の思惟を超越するが、それも自らの存在性をもつ限り、即ち願はれたる存立たる限り、しかして又それは實現され、妥當すべきものとして人間の思惟と意欲を豫想する限り、神の意志にその根源をもつ。畢竟ライブニツツの思想は善きものと意志とを究極の源泉としてもち、この意味にて人性論的なる面影を超越してはゐない。

かくの如きエテイシズム的理解は、かくて、ある意味にてはアントロポロギイシユ人性論的見地としても特質づけ得るであらう。私は人性論もしくは人間學なる概念を廣義に於ての意志と密接なる關係に於て理解したい。吾等の全たき經驗の領域の反省的成果としての學の全領域を廣義の意志の根本作用と基礎範疇の許に立つもの、固有の意味にての *Empirika* の領域として解するを得るであらう。然し本來 *somatich* もしくは血縁的語義を有する *zabporos* の學として、こは單なる人間的を超越する領域——一面に於ては自然哲學的、他面に於ては神學的領域の本質法則性をも、充全の自然さをもつて含みうるであらうか。寧ろ私は、人間的意識との深きアナロギイに於てはあるが、しかし必ずしも人間的領域に局限せらるゝものにてはなき根源的意志に於ける本質的、法則性、人性の根源に於ける *Ursitte*, *Urgesetz* としての *zelos* の學てふ名辭をもつて、よりよくこの根本的にして包攝的なる見地を特質づくるものと考へる。註2

私はかゝる意味に於てライブニツツに對する理解の立場をエテイシズム的として特質づくと同時に、それを以て、また彼の哲學そのものの根本的、性格をも表はす語として選びたい。しかしこのエテイシズムの見方とは只單に彼に於ける倫理學的要素をのみ重視するのではない。彼に於ける個性的實體の概念には人格的個性

としての歴史的實在との基礎的なるアナロギーが含まれ、その形而上學的考想は後者を基礎としての象徴によつて成立してゐると考へる。この立場は故に事實眞理と永久眞理の世界を貫いて存する個性的實體と、それに於ける *conatus* と意志法則とを重視することによつて成立する。従つてこの見方はライブニッツの哲學を、單に客觀的存在たる單子の集合によつて巧みに説明し盡す形而上學として理解するのでもなく、又彼の哲學を自然科學的分析の歸結の上に立てられたるものとするのでもなく、單なる數理のアナロギーとして理解するのでもない。更に又それは、彼の哲學を單なる分析論理の *Panlogismus* として理解するのでもなく、又彼の哲學の根本目的が認識論的眞理を明にするにあつたと理解するのでもない。必ずしもかゝる見解を盡く排斥し去るのではないが、只これらの一つを以て總てを説き盡し得、もしくはこれらの一つを最も根本的なる基礎的要素として採り上ぐることに反對するのである。寧ろこの立場はこれらの見解よりもより根柢的に一の人間のなるものの根本知見とその *Grundschemata* が彼の全思想の奥に潜むと解し、生命そのものの個性的實在の根本事實とそれに於て存する意志の法則性が根本的に定立されてゐたと理解する。この故にこれをエティシズムの立場と言ふも、必ずしもライブニッツの倫

理觀を主とするを意味するのではない。或はこれを人間論的見解と言ひ得ても、併し、この見方は單なる人間中心、若くは人間的なるものの限界にのみ自らを限らうとするものでもない。特に近時に力をもつた Anthropologie は餘りに經驗的有限的であつて、決してライブニッツのそれがもつ形而上學的本質性を掩ひうるものではない。またエテイシズムといふこの命辭はライブニッツに存する單なる人間的なるものを超越する要素を好んで否定するか、の誤解を招くでもあらう。眞に人間的なるものを深く且つ全たき意味にての個體を、實體^①と言ひ得べくんば、私は私の見方の特質をむしろ ontologion と呼びたい。——只これが現代に時めく用法に従つて有限性と相對性とのみ結合さるゝの嫌ひさへないならば。

またかゝるライブニッツに對するエテイシズム的立場とは、彼の哲學を單に主觀主義の成果として意味づけるものでもない。ライブニッツに於ても、客觀主義的要素と主觀主義的要素とがあることは事實であり、その後世に及ぼした影響について見ても、この前者の傳統の許に立つボルツァノ^②や現象學派と、後者の影響の許にあるカント及び新カント派とに、ライブニッツ的なるものの二つの側を認めることが出来る。しかしてこのエテイシズムの見方は人間論的なるものの基礎の上に、すべ

てを内在論的に見る點に於ては、主觀的見方であり、しかもその内面的なるものの裡に本質的、法則的なるものを把持する意味にては客觀的である。それは相對論的、超越論的、啓蒙主義的見方に反對する。しかし此の事は、例へばシュマーレンバッハに於てその傾きあるかの如き、主觀主義的と客觀主義的との二つの側の單なる折衷と見るものではない。經驗的に與へられたる主觀的なるものを通して、人間的なるものの基底にある實體を見出すもの、それは主觀を通しての深められたる實有論への沈潜である。かゝる客觀的人性論、本質的主意主義、個性實體的法則性を見る實有論たる意味を含むものとして、私はこれを最も適當にエティシズムと呼びうると思ふ。

三 Forme substantielle と實體綜合

以上に於て私はライブニッツに對する解釋の立場として、私固有の意味に於けるエティシズム的理解なるものの意味内容を叙した。しかしてライブニッツに對する解釋の立場のこの特質は、同時に、これによつて把捉さるべきライブニッツ哲學そのものの根本的特質をも又しかく特質づくることに一致する。即ちライブニッツ解釋に於けるエティシズムの立場は、彼の哲學そのものの Grundzüge をエティシズム

的として特質づくることと密接なる關係に立つ。

ライブニッツの哲學そのものが根本的にエティシズム的であること、即ち本質的法則をその根源に於て把持する人性論的なるものであることをば、私は先きにも既に指示せるが如く、史的考察と論理的考察によつて、後者を更に詳しくは人性論的論證と實體論的論證とによつて基礎づけたい。即ち人性論的論證にてはライブニッツに於ける根本概念たる個性的實體もしくは實體形相と歴史的實在との關係の考察を通してライブニッツに於ける個性的實體もしくは個性的概念は、現實に見出されたる歴史的實在としての人間の個性より考へ進められ、人間の個性の自覺的特質より形而上學的に考へ深めたるものであることを論じ、實體論的論證にては個性的實體がもつ固有の實體綜合の作用的特質と、調和的宇宙との關係、從つて又創造的唯一者の意志との關係を考察し、エティシズム的見解を通して達せられたる形而上學、神學と、——その形而上學、神學のエティシズム的性格を論じたい。しかして吾等はこれに至る迄に豫めライブニッツ自身に於ける思想發展の徑路に即して、彼の思想的生涯を貫いて存した中心概念たる個性的實體 substance individualité が歴史的個性に於て實現する個性的實在と根本的なる關係あることを考察する史的考察を先づ迪

つて見よう。

一七一四年 Nicolas Rémond に送つた手紙に於て、ライプニッツは青年頃よりの思想の開展を省みて言ふ、『余は少時アリストテレースを知り、スコラの人々にも反感を感せず、今も尙ほ嫌悪は感じ申さず、併しその頃よりブラトー及びプロチノスに満足を覚え申候——今も記憶に存し候が、十五歳の折、ライプテヒ近郊、ローゼンタールの森を獨り道ひ乍ら、實體、形相を採らむか捨てんかに迷ひ居り候ひし。』——*et je me souviens que je me promenai seul dans un bocage auprès de Leipsic, appelé le Rosental, à l'âge de 15 ans, pour délibérer si je garderais les formes substantielles.* かくてこの迷ひの後、終に機械觀が勝利を占めて、彼は強く數學を研究した。しかし、力學の究極理由や運動法則そのものの究極理由を求めたとき、そは數學の中には求めえず、形而上學に歸り來らざるを得ぬことを知つた。かくてエンテレキーに戻り來つて、質料的なるものから形相的なるものに終には單子即ち *substance simple* が眞の實體であり、質料的なるものは只現象に過ぎずとし、そをよき根據と充分な結合をもてる現象として理解した。(Brief an Nic. Rémond. Erd. S. 701 f. Schmal. II. mit Komm. S. 191) かくして數學は次第に根本知見よりはその地位を譲り、彼は愈々形而上學に進み行いた。しかしてこの形

而上學とは單なる機械觀に立つものではなく、それは自ら、『よき根據と充分なる結合をもつ現象』を可能ならしむる實體、必ず自らに自覺と綜合の力をもつ實體に關するものでなければならぬことになつた。

この實體形相の考へが、個性概念と結合して發展したことは、注目すべき彼の最初の論文に於て見る事が出来る。ライプチツヒに於ける苦惱の散策は彼が僅か十五歳の時のことであつたが、越えて十七歳には、彼のイエナ時代を標しづくる、今日に残る彼の最初の學術論文 *Disputatio Metaphysica de Principio Individui* 1663 (*Akad. Soehle Reihe Erster B. S. 3 f.*) がその結晶を告げた歳である。トーマスとスコツスとの個體化の原理の考察をなしたこの論文は、實に彼の全生涯の *Force directive* を決定したものと云ふべきである。この論文にて彼は當時、スコラ哲學の研究の影響の許にあり、特に唯名論的確信に立つてゐたことが明かである。茲に彼は *Omne individuum sua tota entitate individuatur* —— 凡ての個體はその存在を構成する存在の本質全體によつて個體化される、といふ命題の論證に従つてゐる。彼の論證の過程は凡そ次の如きものである。——もし存在を作りなす本質全體が個體化の原理でないとするれば、個體化の原理なるものは一の否定であるか、もしくはは定立である。しかしてもし、後者の

如く定立となす場合は、本質をより明かに限定する部分、即ち經驗的存在であるか、もしくは種を更に明かに限定する形而上學的部分即ち *Haecceitas* であるかである。*Haecceitas* とはスコッスが論じた『このものたる性質』即ち唯一的な現實的な個別的性質を意味するのである。もしまた前者の如く、個體化の原理を否定とする場合をつぎつめると *universale magis esse ens, quam singulare* 『普遍的なるものは個體的なるもの以上に實有である』といふ概念實在論的命題を承認することになる。けれどもライブニッツには當時既に個體をもつて積極的實在 *ens positivum* とする考が確定的であつたが故に、それは否定的なるものによつて構成されるとは考へることが出来ないとなし、*negation non potest producere accidentia individualia* 『否定的なるものは毫も個性的徴表を齎らしうるものにあらず』と論斷した。然らば先きに前提した如く、個性化の原理は存在であると考ふれば、これは『個性化の原理は全存在を構成する *entitas* である』といふ最初の命題に合致するか、もしくは存在と本質との分離を許す背理に陥ることになる。前者の考にては、存在と本質とは單に概念的に差別されるに過ぎずといふその師シェルツェルの考を保持せるものであり、後者の如くこの兩者の差を事實的にとれば、存在を剝離されたる本質といふものの實在を許すこ

とになる。ライブニッツは當時より既に個體に着目し、その個體を可能ならしむる個性化の原理を求めて、しかも、これを單に理論的に本質と存在とを抽象的に分離して安易なる解決を求めることなく、あくまでも存在そのものの全體的性質に個性化の原理を求めたのである。ライブニッツはスコツスの思想をついで、現實的唯一的なる個性に着目したことは既にこの當時よりの根本傾向であつた。ライブニッツは類が種差によつて種ススライネになる様に、種が個性差によつて個體に Konstatieren するといふ考へに反對して、類は何物かによつて種となり、種が個體といふものになるのではないとなし、類といひ種といふも只知性によつて考へられたるもの以外のものではないとして、唯名論的主張をなしてゐる。彼にては、現實には只個性的なるもののみが實在し、實在する所のものはその存在そのものによつて何らか個性的なるものとなるのである。

しかしてこの論文の系命題には存在の本質に關して *Essentiae rerum sunt sicuti numeri* 『物の本質はいはゞ數である。』 *Essentiae rerum non sunt aeternae nisi ut sunt in Deo* 『物の本質は神の中にあるものでなければ永遠ではない』などに表明されてゐる如く、一面、存在の本質を數理的に考へ、數學と形而上學とを融合するピタゴリアンの傾向

を著しくあらはし、それは單なる現實を根據とする經驗論でもなく、彼の眼は現實に於ける本質を、しかもそれを *sua tota entitate* によつて説明せんとするにあつた。單なる概念の抽象を去つて現實の個性を直視し把捉せんとする *Individualism* と *Positivism* と、しかも、これを數學的嚴密性をもつて理性的に認識せんとする *Radicalism* と *Rationalism* とは、既にこの最初の論文にその確固たる根本傾向を示してゐる。しかしてこの現實存在を常に全體として單なる搖ぐ現象以上の原理に於て捉へんとする全體觀と形而上學的知見と、——量に即する質と、全體の連續に於ける發展觀を導く目的論とは、この若き著作には辛うじてその指示傾向を見出すのみである。

ライプニッツ思想の根本特質は、彼の全思想發展の全過程を通じて、それに伴うて著はされたる種々なる論著を大觀することによつても明かにすることが出来る。

一六六三年の個體化の原理についての考察に次いで、一六六五年には法律學の論文『條件論』*De conditionibus* 註を著したが、同じ一六六五年に生れた *Combinatoria* の思想は翌年の『結合法論』*Ars combinatoria* 同上となつて現はれ、數學的思想は論理學と結合して一般に科學體系の構成の基礎的作用に應用され様とし、彼の後年の科學的體系に重要な基礎として据ゑられた。これに續いて彼には *Vieta* や *Raymundus Tullius* 等の影響

の許に『普遍記號法』(Characteristica universalis)を本質的手段とする『普遍學』(Scientia universalis)の思想が開展した。しかしして既にこゝにも注意しなければならぬのは、彼にては、嚴密なる解析は常に集合を豫想し、前者は常に後者のために存してゐたことである。そしてこの數學的嚴密性を種々なる實踐的人間的領域に適用せんとする『普遍數學』(Mathesis universalis)の偉大なる企ては、人間的經驗の數學化ではなくして寧ろ人間的なるものの嚴密なる理解のための數學的方法化に外ならない。記號法は記號法のためにその意味をもつたのではなく、普遍的文法學及び一般に全科學の彙類體系の創造のために考案されたものである。彼は解析や結合法をもつて數理と論理を結合し、更にこれによつて倫理學や政治學、法律學に、一定の原理より出發して科學的論證を行ふことが如何にして可能なるかを見ることを念とした。『新たな論理的發見による三位一體の辯護』(Defensio trinitatis per nova reperta logica)『教授的及び學習的法律學の新方法』(Nova methodus docendae disciplinae jurisprudentiae)の著や、更にかゝる方法の適用によつて『政治的論證の範例』(Specimen demonstrationum politicarum)を示し、^{註4}嚴密なる演繹的論證をもつて、何故にファルツ伯フィリップ・ウァルヘルムがポーランド王に選ばれるべきことが必然なるかを論證せんとさへしてゐる。これはス

ピノーザがかの幾何學的論證を適用したエチカの出づる八年前にあつてゐる。

一六七〇年 Marius Nizolius の *De veris principiis et vera ratione philosophandi* に附せられたる *Dissertatio de stilo philosopho Nizolii* は、註從來しかく注目せられざりに反して、彼の形而上學的思想が一の闡明なる表現を示した重要な文献である。こゝにては彼はニッオリウスの唯名論に同せず、又概念より個體を導く實念論の缺點を避けつゝ、概念はそれくに *totum distributum* としての全體的性質を具せる個性的實體たることを表明した。即ちそれは *totum discretum* に反し、自らに連続をもつ全體として見られ、實體そのものの質的見解が強められ來つた。更に一六七四年に至つては彼の普通の記號法と數理的嚴密化の思想とは愈々尖銳深刻化して終に微積分の考へとなつて收斂し、學界に劃世紀的なる貢獻をなした。しかし彼にては微積分とは畢竟量の根源的質化に外ならず、彼に於ける微分に對する積分の優位は疑ひ得ざる根本特質である。更に一六八〇年に至つて哲學及び神學の方法をもつて固有の目的觀として最も闡明なる自覺に到達した。そして一六九六年終にモナツドの概念を得て、モナツド論による調和、體系、意志、自由等の原理的解明に最も適はしき思想として熟成し、歴史、宗教、世界精神の考察の形而上學的、實體論的考察として固有なる體系を具へて

表現し、この人性論的領域が必ずしも嚴密數理の轉用の領域としての意味をのみ有するものにあらざること、を明かにし、その適用の單なる副産物たるかの觀より脱した。否晩年の圓熟したる形而上學的成果は、その數理的、自然科學的要素と本質的人性論との融一を示すのみならず、却つて數理は究極知の認識の嚴密性を保證する方法的意味をのみ有してゐると認むべきである。

ライブニッツの業績として從來重要視せられ易かつた數學的、自然科學的、又は論理學的論著の多き半面には、必ずこれと同時に、豊富なる歴史、宗教的、政治的、倫理學的考察の發表されつゝあつたことも注目すべき事實であつて、これは一たび彼の簡單なる略傳を見るもの、もしくは彼の業績に關するボーデマンのカタログを見るものの容易に知り得る所である。^{註6} 彼に於ける極めて普通なる著作だけに就て見ると一六六六年の『結合法論』*Dissertatio de arte combinatoria* につゞいて、同年には『法律に於ける複雑なる事件』*De casibus perplexis in jure* ^{註7} があり、彼がドクトルの學位を得たのは實にこの論文に於てである。ついで一六六七年には法律學の方法論 *Nova methodus discedit de docendaque jurisprudentiae* がある。同じ六七年より七二年に亙るメイッ時代は彼は全く法典の編纂に従事し、他面に於ける關心の業績として『抽象的

運動論の理説』 *Theoria motus abstracti* 『新物理學假設具體的運動の理論』 *Hypothesis physica nova, Theoria motus concreti* ^{註9}等擧げうべきに比して、その間の法律論、政治論は實に雜多にして豊富である。この時代には彼の形而上學的關心は一面自然哲學に向つてゐると同時に、しかし深遠なる『無神論者に反對する自然の信仰告白』 *Confessio naturae contra atheistas* 『カトリック論證概要』 *Demonstrationum catholicarum conspectus* ^{註6}を殘して他日の宗教論の伏線を豫示してゐる。一六七四—五年の間、微積分の思想の着想ありしに對しては、七七年には『ドイツ諸侯の主權及び使節の權利論考』 *Tractatus de jure suprematus ac legationis principum Germaniae* と『事物と言葉との結合に就ての討究』 *Dialogus de connexione inter re et verba* ^{註10}が著はされてゐる。而してこの間、スピノザへの傾倒を脱して一六八〇年『哲學及び神學の眞方法』 *De vera methodo philosophiae et theologiae* ^{註11}を書き下した頃をもつて明かに目的觀に進んでスピノザより離れた。彼の思想の確立時代を標しづける一六八四年に於ては、微分積分學綱要 ^{註12}の著あると同時に又著じき『認識、眞理及び觀念に就ての考察』 *Meditationes de cognitione, veritate et ideis* ^{註13}を公にしてゐる。

一六八六年以後彼はアルノーとの論争を轉機として、多くの論著の公表を見合せ、

爾來一六九四年に至る約十年は宗教運動に關心を向けた。この一六九四年に至つて『第一哲學の改善と實體概念』*De primae philosophiae emendatione et de notione substantiae* 同じ九五年には『相互作用とその原因の力學』*Specimen dynamicum pro admirandis naturae legibus circa corporum vires et mutuas actiones detegendis et ad suas causas revocandis*、實體の本性についての『新體系』*Système nouveau de la nature et de la communication des substances, aussi bien que de l'union qu'il y a entre l'âme et le corps* 同じ九七年の『事物の根本起原』*De rerum originatione radicali* 註14等の著あり、モナッド及び豫定調和説の圓熟を示し從來の二つの方向數學的自然科學的と人間の人文科學的研究——若くは科學的と形而上學的の原理の根源的合一に達したるの觀がある。しかしこれは決して二つの相併立した、根源を異にするものの偶然なる結合と見ることは出來ず、むしろライブニツツの壯時よりの根本知見は後者にあつて前者はその嚴密なる認識に達せん爲の方法的意味を有するものと見るの却つて自然なるを見る。彼の根本的關心は *metaphysisch* にあり、*physisch* の研究は單にその眞にして實なる認識に到達せんための橋梁であり、包まれたる眞實を顯はにする爲の錦衣の吟味たるに過ぎないと見ることが出来る。しかして一七〇〇年以後の圓熟時代の作品たる『神の善意、人間の自由、

及び惡の起原に關する辨神論』Essais de Théodicée sur la bonté de Dieu, la liberté de l'homme et l'origine du mal 『唯一宇宙精神に關する考察』Considérations sur la doctrine d'un esprit universel unique 『生命の原理及び造形的自然に關する豫定調和論著者の考察』Considérations sur les principes de vie, et sur les natur's plastiques, par l'auteur du système de l'harmonie préétablie 及び『モナドロチー』にては明かに人間的なるものの本質の追究が主となり、それに於ける個性的實體が根本概念となり、個性とその創造者との關係に向けられたる形而上學的考察が王座を占めて、數理的科學的考察は、その認識の科學性を與ふるの方法論的意味を有してゐる。

彼の全思想の發展と、その固有の體系の收熟の根柢には、寧ろ一のより深き人性論的思想が基底に横はつておもむろに醗酵しつゝありしことを見送すことは出來ない。私はかつてハノーバーのライブニッツハウスを訪ひ、その圖書館に残る尨大なる未刊稿本を見て、それがボーデマンのカタログによつて吾等が想像しうる以上に遙かなる驚異に値するものであり、しかもその斷片には歴史的人文科學的考察に屬するもの甚だ多きことを知つた。ライブニッツの著作に於て後に速かに公刊され、注目を牽いたものが、特に自然科學的唯理論的傾向のものであつたのは、主として

彼及び彼に亞ぐ時代の啓蒙的もしくは自然科學的關心によつて動機づけられたのによるのであらう。しかして彼にてはこの後者の部分、人性論的人文科學的論著は一般に單に歴史的經驗的に考察されたるものではなく、本質的に、先天的に、科學的に、嚴密なる法則的認識に到達することを目的として追究せられてゐたことは言ふ迄もない。ライブニッツよりこの人間の歴史的領域の研究を看過することは出來ない。彼の學的動機よりこの最も奥深き熱情を抹殺し去ることは出來ない。ライブニッツに於けるかゝる豊富なる人間の歴史的領域への關心と著作とは、彼に對する人性論的理解が決してその妥當を無効に要求するものでないことを示す。しかしてライブニッツに於けるこの領域の本質的法則的認識の追究をもつて、單に悟性的啓蒙主義の勞作と看做し去ることの出來ないのは固よりである。

私の見解によれば、ライブニッツに於けるこの人文科學的形而上學的關心と知見とは、決して數理的自然科學的關心と知見の單なる適用ではなく、前者に於ける嚴密性の學的訓練は、却つて後者に於ける終極の原理とその嚴密なる把握のための方法的意義をのみ有するものである。解析や結合の考察は無限規定の全體の統一としての個性的實體を悟性的に明かならしめんとするイデーによつて導かれ、微積分の

創見を齎らしたものはアルブートの論争やモナドロヂーに於て伺ひうる如き物質と精神の聯關に關する無限小實在の思想であつたらう。よしライブニッツに於ける數理的論證はそれ自身の關心と *Ideatione* によつて開展したものであるとはいへ、少くもその半面にては常にこの純なる原理の、人と宇宙に於ける妥當が豫想されたる、もしくは要請されたる方として、彼に於て根柢的な力を働らいてゐたことは疑ひえない。

さて私は以上に於て極めて不充分ではあるが、ライブニッツに對するエテイシズム的理解と、ライブニッツの思想そのものが根源的な意味にての人性論的な根本特質を有するものなることの論證として、先づこれを史的に考證するために彼の思想發展のあとに就いて見た。次に私は更に論理的論證を辿るために、彼に於ける根本概念たる個性的實體と歴史的實在との關係を見る人性論的論證と、彼の實體綜合そのものを究める實體論的論證との過程を進まねばならぬ。

ライブニッツの論理學並びに形而上學を一貫する根本命題は『眞の命題の述語は主語に内在する』 *praedicatum inesse subjecto verae propositionis* といふことである。この述語を含む主語はライブニッツに於ける中樞概念たる個性的實體と如何に關係す

るであらうか。吾等はしばらくこれに就て語る興味ある箇所たる『形而上學叙説』 Discours de metaphysique の一齣について學んで見よう。しかしてこれの精査は自ら彼に固有なる個性的實體の概念と人格的實在、人間的意識との相契合せる彼の思想の源泉をさとらしめる。

ライブニッツによれば個性的實體 substance, individuelle とは即ちそれ自身完全なる實在の本性であり、これによつてそれ自身完了せる一の概念が理解さるべきである。即ちその概念の屬する主語のあらゆる述語が、それより充分に理解され演繹的に導かれうべきものである。——これに反して偶有的なるものにあつては、その概念が、その性質の述べらるゝ當該主語に歸しうべきものの總てを包有してゐない。例へばアレキサンドル大王自身は一の個性的實體であり、主語となるが、それに屬する王といふ性質の如きは偶有的であり、主語に屬する述語たるものである。神が歴山王の個性概念もしくは *in hocce* を見れば、同時に彼に就て眞に言ひ得る凡ての述語、例へば *Duis* 及び *Parus* に打勝つたらうと言ふこと、などの根據及び理由をそこに見る許りでなく、天命を全うするか、毒殺されるかといふ様な、我々には歴史によつてしか知ることの出来ないことを、アプリオツに、即ち經驗にはよらずして、知ることも出來

る。故に人もし、事の聯關を正しく考察するならば、歴山王の心に於て、彼に起りしあらゆる影響や、尙ほ後に現はるべき徴候、否、それのみならず、宇宙に於て遭遇する凡べてのことの痕跡も常にそこに存することを認めうるであらう。勿論そのすべてを認めることは、ひとりたゞ神のみに歸せらるゝとは言へ。(cf. IV. S. 433f)

彼は個性的實體の解明に於て、その壯時の個體化概念の論究に於て示した様に、單なる抽象の普遍概念を排する唯名論的傾向を採ると同時に、しかも、その特質を解明するにあたつて最も適切に、人格的個性概念を採用した。ライプニッツの原稿によれば、彼は個體の例をひくに、最初一個の指輪の例をとり、後にこれを歴山王といふ人格をもつてかへた。(Vgl. Schmalenbach: Originaltext: I. S. 9, Komm.) 彼にては實體とは必然に意識をもつ實體たることを要し、これによつて初めて個性の眞意味と特質を明かにしえたのである。

以上は彼の思想確立期に於ける『形而上學叙説』に就て見たのであるが、後の一六九八年の『自然そのもの』(De ipsa Natura^{註15})に言ふ所に就て見ても、殆んど同様の思想がより明かに解明され、否、個性的實體を自己の本性もしくは自覺の自證を基として論じ、これを却つて自然的實體に類推せる思惟過程を伺ふことが出来る。——『事實、精

神が考へ且つ欲するといふこと、多くの思惟や意志が吾等の中に生ずると言ふこと、即ち吾等が自發的なるものを持つと言ふことをば、誰も疑ふことは出来ない。これを疑ふことは、人間の自由を否定し、吾等の內的經驗もしくは意識の自證に矛盾する。しかもこの自證によつて、反對者が何等の理由なしに神に歸してゐるものが、正に吾等自らのものだといふことを自覺する。しかして、もし、吾等の精神に内在的作用を生ずる、即ち、内在的に働く内在的な力のあることを許せば、他の動物もしくは形相、否むしる、實體の自然にも同じ力が内在してゐると言つて差支へがなく、否その方が妥當である。』(Cf. IV. S. 310f)

久しきに亙つたアルノーとの論争の最初の端を拓いたものも實にまたこの個體概念であり、ライブニッツもアルノーとともに『個體概念、例へばアダムその人自體、神の悟性に於けるものとしてのその人』といふ表現を用ひて討究してゐる。(*Lectione* on *Arnould* 13. mai 1686. *G. II. S. 25f*)そして又主語といふことの説明にあたつては屢々『私といふ完全な概念』といひ、自覺をもつ自己自らをその最も手近なる實體として擧げ、又『自我のみが神の完成態なり』として擧げてゐる。(Cf. *II. S. 37f, 73f*)かくて實體と言ひうべきものは自我のアナロギイをもつて理解しうべきもの、『凡ての

ものは精神に類似し、一種の有機體と結合した眞の統一の原理を含むものをもつて充たされてゐる。』(Système nouveau, utext Gr. IV. S. 473) 實體の本質をなすエンテレヘイアは即ち精神である。(Monadologie S. 63, 74) 根源的エンテレヘイアとは生命の原理である。entéléchie primitive ou (si vous permettez qu'on se serve si généralement du nom de vie) d'un principe vital (Lecture ou Arnauld. G. II. S. 118) —— ライブニッツに於て實體は個性的なるものであり、個性をもちつゝそのすべての屬性を自らに統一する、自らに充たなる完成體であり、自覺と自らの綜合力をもつ精神である。しかしてそれは歴史的に實存する人格的個性のアナロギーに於て規定せられたるもの、彼の實體概念はこの意味にて人性論的意味をもつものなること、もしくはそれを通して達せられたる形而上學的概念であることは疑ひえない。私はこれによつてライブニッツの根本思想たるモナドロデーは歴史的實在の自覺を通して達せられたるものであり、後者の象徴的思想としてのみその眞なる理解が可能であると考へる。然らばかゝる意味内容をもつ個性的實體はアリストテレース以來の實體形相 *eidos ontológos, forma substantialis* と如何に關係し、ライブニッツにてはそれが特にこれらに比して如何なる特質をもつであらうか。(この項つゞく)

註 1

畏敬すべき錦田教授のライプニッツに關する考察も、尙ほ一般に論理主義に捉へられ過ぎたるの感がある。この單なる論理主義的理解より超越せんとする所で氏の論文は中絶してゐるのは、奥々も遺憾である。(參照、錦田義富、ロッチェ妥當説の由來、大正六、七年哲學研究。最近のライプニッツ研究に就て、大正六年、哲學研究。)

註 2

等しくこの人間論的理解に關して、カントの學說を毫も認識論にあらずとし、プラグマティクの人間の實有の本源性を説くハイテッカーのカント解釋も、カントを純粹理性批判に於てのみ限局して理解することに對する反抗としては正しいであらう。カントの研究と理解に於ては決してハイテッカーに劣ることなきコーヘンの解釋に於て、——たとひそこには *deutsche Gemüth* よりも *semitscher Rationalismus* が根柢的色調を染めてゐるとは言へ、——その實踐的歴史の領域に於ける意志の理解及び感情領域に於ける意識の根源的なる統一觀に於て、その余なきカントを見出すものと思ふ。カントの先驗的構想力に於ける、フィヒテに由つて深くも掘み出されたが如き根柢に作らく意志を無視しては、眞のカント的なもの、理解には疎かるべく、有限の自覺とは意志的實在としての歴史の個性の自覺でなければならぬ。歴史の領域に於ける根本作用、基礎的範疇としての意志を自覺するにあらずんば、單なる有限と關心の哲學はプラグマティズムと何等選ぶ所はなく、かゝる意志の本質的、法則的なるものの自覺のみ、そをエティシズムに高める。

註 3

以下に舉示するライプニッツの著作の年代及びそのゲルハルト版アカデミー版及び *Gesamm. Math. Schrift.* マッヘナウ版等に於ける附頁を示せば左の如くである。

Disputatio juridica (Prior) de conditionibus 1.65 Akadm. 6 Rh. 1 B. S. 97.

Disputatio juridica posterior de conditionibus 1655 Akadm. 6 Rh. 1 B. S. 125.

Dissertatio de arte combinatoria 1666 Gerh. IV. S. 27 f. *Mathematische Schriften* V. S. 5.

註 4

Defensio trinitatis per nova reperta logica 1665? G. IV. S. 111.

Nova methodus docentiae discendaeque jurisprudentiae. 1637 Akadm. 6 Rh. 1 B. S. 259.

Specimen demonstrationum politicarum pro eligendo rege Poloniarum, auctore Georgio Ulricio Lithuano 1659 Königsberg.

revocandis. 1695. Math. Schrift. B. VI S. 234

『新體系』へはくは、『實體の本性及び實體の交通』並びに精神物體間に存する結合についての『新體系』Système nouveau de la nature et de la communication des substances; aussi bien que de l'union qu'il y a entre l'âme et le corps. 1695 Gr. IV S. 477 f.

De rerum originato e radicali. 1697 Gr. VII. S. 302 f.

Les ais de Théodicee sur la bonté de Dieu, la liberté de l'homme et l'origine du mal (一六九七年より一七〇七年の間に成る) Gr. VI. S. 21 f.

Considerations sur la doctrine d'un Esprit Universel Unique. 1702. Gr. VI. S. 529.

Considerations sur les Principes de Vie, et sur les Nature's Plastiques, par l'Autheur du Système de l'Harmonie pr. établie Gr. VI. S. 539 f.

註15 『自然そのもの』へはくは『自然そのものに就く』即ち神に造られたるものの内在的な力及びその作用について』De ipsi natura, sive de vi insiti actionibusque creaturarum. 1698. Gr. VI. 504 f.